

昭和 文学 全集



28

唐木順三

保田與重郎

亀井勝一郎

竹山道雄

加藤周一

佐伯彰一

篠田一士

大岡信

山崎正和

昭文全集 和学



28

唐木順三

保田與重郎

亀井勝一郎

竹山道雄

加藤周一

佐伯彰一

篠田一士

大岡信

山崎正和

昭和文学全集

第28巻

平成元年六月一日 初版第一刷発行

著者——唐木順三 保田與重郎 亀井勝一郎

竹山道雄 加藤周一 佐伯彰一

篠田一士 大岡信 山崎正和

発行者——相賀徹夫

発行所——小学館

一〇一〇一—東京都千代田区二ツ橋二丁目二番二号

振替 東京八二二〇〇番

電話 編集・〇三三・三三〇五二二六

業務・〇三三・三三〇五二二六

販売・〇三三・三三〇五二二六

印刷——大日本印刷株式会社

製本——大日本印刷株式会社

若林製本工場

用紙——三菱製紙株式会社

著者捺印は省略いたしました

Printed in Japan ISBN4-09-568028-8

©FUSAE KARAKI NORIKO YASUDA FUMIHIKO KAMEI

YASUKO TAKEYAMA SHUICHI KATO SHOICHI SAEKI

AYAKO SHINODA MAKOTO OOKA MASAKAZU YAMAZAKI 1989

*造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。 *本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

目次

唐木順三

5

小倉時代の森鷗外

『礼儀小言』の問題

現代史への試み―型と個性と実存― より

中世の文学 より

世阿弥

道元

応仁四話 より

しん女語りぐさ

慈照院義政

あずま みちのく より

実朝の首

熊谷直実入道

続 あずま みちのく より

清衡考

保田與重郎 161

日本の橋

誰ヶ袖屏風

正岡子規について

今日の浪漫主義

他界の観念

有羞の詩

清らかな詩人 ヘルデルリ―ン覚え書

日本文芸の伝統を愛しむ (「後鳥羽院」より)

宮廷の詩心 (「後鳥羽院」より)

蕪村の位置

明治の精神―二人の世界人

2 6 9 日本に祈る 自序

2 7 1 わが万葉集 より 一、四

亀井勝一郎 2 8 9

人間教育 より

2 9 1 第一章 疾風怒濤の時代

3 1 1 第五章 美しきヘレナ

3 2 3 大和古寺風物誌 より 斑鳩宮

美貌の皇后 より

3 3 9 美貌の皇后

3 4 5 中尊寺

文学と信仰 より

3 5 4 井伏鱒二

3 5 7 小林秀雄

現代文学にあらわれた知識人の肖像 より

3 6 3 矢代耕一郎「横光利一」旅愁――

3 7 0 大庭葉蔵「太宰治」人間失格――

3 7 7 我が精神の遍歴 より 第一章 罪の意識

4 1 5 古代知識階級の形成 序

竹山道雄 4 2 3

4 2 5 ビルマの豎琴

4 9 9 將軍達と「理性の詭計」

5 0 2 失われた青春

5 1 5 蓮池のほとりにて

5 1 9 スペインの贗金

5 2 9 スイスにて

加藤周一 5 3 9

5 4 1 詩仙堂志

554 仲基後語

584 日本の庭

598 仏像の様式

622 一休という現象

643 世阿弥の戦術または能楽論

659 木下奎太郎の方法

佐伯彰一 667

669 日本人の自伝

篠田一士 779

日本の近代小説 より

781 序にかえて

786 泉鏡花の位置

802 もうひとりの「或る女」

818 風俗の効用について

848 夢見る部屋の構図

大岡信 865

うたげと孤心 より

867 歌と物語と批評

884 公子と浮かれ女

904 帝王と遊君

922 今様狂いと古典主義

940 狂言綺語と信仰

山崎正和 965

967 鷗外・闘ふ家長 より 第二部

1015 不機嫌の自覚——志賀直哉「不機嫌の時代」より

1025 オイディプス昇天

1045 作家アルバム

解説

1053 唐木順三……粕谷一希

1058 保田與重郎……谷崎昭男

1063 亀井勝一郎……武田友寿

1068 竹山道雄……高橋英夫

1072 加藤周一……ジャン・ジャン

1076 佐伯彰一……入江隆則

1080 篠田一士……出淵博

1084 大岡信……三浦雅士

1088 山崎正和……丸谷才一

年譜

1092 唐木順三……竹盛天雄

1096 保田與重郎……谷崎昭男

1100 亀井勝一郎……武田友寿

1104 竹山道雄……平川祐弘

1108 加藤周一……小久保実

1112 佐伯彰一……佐伯彰一

1116 篠田一士……篠田一士

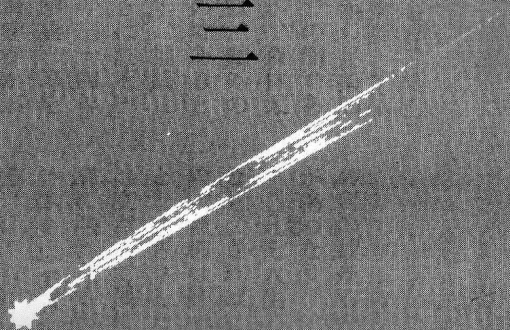
1120 大岡信……三浦雅士

1124 山崎正和……浦西和彦

1128 底本について

1130 用字用語について

唐木順三



小倉時代の森鷗外

鷗外は九州小倉に明治三十二年から足掛四年いた。三十八歳から四十一歳までの間である。第十二師団軍医部長というのが、森林太郎の肩書であつた。この小倉時代は、鷗外の一生を知る上に特に注意すべきものであると私には思われる。私は明治三十三年、福岡日日新聞のために書いた『鷗外漁史とは誰ぞ』及び千八なる名を以て三十三年より三十四年にわたり、二六新報に載せた『心頭語』等を中心として、この時代の鷗外の心情をうかがつてみたい。

鷗外が何故に小倉に転ぜられたかは私は詳しく知らない。が、次の文は我々にその原因を暗示している。

「△爰に人あり。官に在ること二十年、休沐を賜ふに非ざるよりは、日として登衙せざることなくして、一朝忽ち曠職の誹を受く。そ

の何の故なるを問へば、平生述作する所あるが為めなり。

△凡そ人生の嗜慾、文学詞芸より淡なるはなし。さればこそ古の武夫の国風を好めるもの、我には許せと曰ひ、人亦これに許して累となさざりしなれ。史乗の伝ふところ、或は文章もて禍に逮ぶものあるは、言ふ所の忌諱に触れたるが為なり。その単に文章ありといふを以て罪を獲るものは、今の世に始まる。

△同僚に容れられざるものあり。一語の人の援助を求むるにあらずして、二三同好の士これが為に出力す。誹るものは即ち謂ふ。渠何ぞ敢て運動して官紀を紊ると(『心頭語』)。

鷗外はまた重ねて書いている。

「△人の地方に遷るものあるに会へば、その官を進められたるにも拘らず、渠必ず不平な

らんと曰ひ、その色を窺ひ見、その行を探り聞き、その人をして殆安処すること能はざらしむ、是れ人皆競望す、渠何ぞ独り競望せざらんとの忖度に本づく、陋なりと謂ふべし。

△官人の公余に少しく為すところあるをみれば、その人公事に専ならずといふ。若しこの言に貶斥の義ありといはば、おのれはその人の余力なきやを問ひ究めたる後、始めてこれを諸ふならん。若しその人余力あり、その公余の業士人の所為に恥ぢざるものなるとき、尚そを惡しざまに言ふものあらば、おのれは言ふものの本意故らに余力あるものを中傷するにありとなさん(同上)。

これらによつて察するに、鷗外の小倉行は、上司からいへば、彼が述作をなし、小説をつくり、職を忽にするの罰、或は文章を弄ぶものと同居することのうるささから来る遠島の意味であつた。鷗外と同僚または下僚は、補第十二師団軍医部長と共に「任陸軍軍医監」の辞令を貰つたのを、彼の運動の結果とした。「故らに余力あるものへの中傷」というのが、鷗外の前者への答であり、「陋なりと謂ふべし」というのが、後者への一喝であつた。

鷗外はこの無実の誹と、満々たる不平をもつて小倉に去つたのである。彼にとつては貶謫に相違なかつた。

日清戦争勃発を境として、『しがらみ草紙』を廃刊し、鷗外の鋭い筆が一度かくれ、批評の陣を退くと同時に、鷗外への攻撃は諸所より一斉にひらかれた。多くの新進が、鷗外なきあとの論壇にのぼりはじめた。いくばくもなくして、鷗外は小倉へ遠ざけられたのである。

「予は人の葬を送つて墓穴に臨んだ時、遺族の少年男女の優しい手が、淨い赭土をぼろぼろと穴の中に翻すのを見て、地下の客がいかに軟な暖な感を作すであらうと思つたことがある。鷗外の墓穴には沙礫乱下したのを見る外、殆ど軟い土を投じたのを見なかつた。只だ一ついくらか手軟だと思つたのは、ほととぎすの記者が、鷗外も最早今まで我等に与へた程のものをば与ふことを得ぬであらうと云つた位なものだ」(『鷗外漁史』とは誰ぞ)。森林太郎は黙つて、鷗外に幾条かの筋があたり、砂にまみれるのを小倉でみていた。「鷗外漁史はここに死んだ」と繰返し語り、「予は私に信ずる。今この阪邑に在つて予を見るものは、必ずや怨懟不平の音の我口から出ぬを知るであらう」(同上)と断言した。が、彼の心は決して平であつたわけではない。口をとじることを言つた彼も、「予を以て文壇に対して耳を掩ひ目を閉ぢて居るものとなしたならば、それは大に錯つてゐるの

であらう」と書き加えている。また時に不平の口を開かないわけではなかつた。当時の新進、宙外、抱月、鏡花等を「エビゴノイ」として一括し、己が友人露伴をたたえているのがその一例である。

『心頭語』にもまたこう書いた。

「未だ名を成さざる第三流の文人二三人の新に頭を擡げんが為めに、文壇知名の士を倒し尽さんとせしは、さいつ頃いとかしましかりし所謂旧大家攻撃の真相にあらずや。譬へば未だことごとく実らざる良田を刈りて、数茎の苗を挿まんとせしが如し。」(『冬枯に野山見たせば、輪困たる古木の幹の灰色なると、新にすらすらと立ち伸びたりと見ゆる若木の、膚色猶緑なると、いづれもその葉落ち尽して、何の見どころもなきながら、若木の方は来ん春の花いかに美しからんと待たれ、古木のかたは早や枯れたるにはあらずやとあやぶまるるは、人情の常なり。さるを春来て後に往きて観るに、その枯れもやしぬるとあやぶまれし木に、鮮なる花の空を蔽ふまで咲き満ちたるさま、まことにおもひの外なる心地せらるるといふことあり。』)

が、鷗外も、時にまた悄然とした自己を語らないこともなかつた。具原益軒の筑前国統風土記外一冊を人から贈られたとき、「これ等や辺土に老いんとする痴人のせめてもの慰

藉なるべき」と言い、「歴史を愛すといはば、猶その人の志の壮なるを想見するに足りなん。地誌を喜ぶといふに至りては、誰かはその人の気餒多力衰へたるを憫まざるべき」(『心頭語』)とも書いた。小倉をしばしば「阪邑」とよんでいるのを見ても、その心持にふれることが出来る。

「鷗外は死んだ」と自ら書いたことは先に示したところである。彼は如何なる経過をたどつて、自ら森林太郎一人となつて、作家森鷗外を葬るにいたつたか。我々はそこに悲痛なあるものに会ふ。

「予が医学を以て相交はる人は、他は小説家だから与に医学を談ずるには足らないと云ひ、予が官職を以て相對する人は、他は小説家だから重事を托するには足らないと云つて、暗暗裡に我進歩を礙げ、我成功を挫いたことは幾何と云ふことを知らない。予は実に副はざる名声を博して幸福とするものではない。予は一片誠実の心を以て學問に従事し、官事に軼掌して居ながら、その好意と悪意とを問はず、人の我真面目を認めてくれないのを見るごとに、独り自ら悲しむことを禁ずることを得なかつたのである」(『鷗外漁史』とは誰ぞ)。

これは單なる泣言ではない。私はこの中に林太郎と鷗外との相争う姿を想像する。彼は

当時の官人、官僚世界に憤怒を感じていた。

「競望の風の賤むべきを知らず、退讓の徳の尚むべきを知らざるは、今の肉食者の同じき所なり。故に上に居るものは猜忌の念を以て下に臨まざるに能はず、下に居るものは、縦令自ら退讓せんと欲せんも、人皆競望ありと見做すを奈何ともすべからず、末流はその間に処りて煽動し、蜚語はその中より生じて横行す、明哲の士に非ざるよりは争でかその身を全くして始あり終あらしむることを得ん。」「老いたる上官と席を同じうして、我はかの息断ゆるに至らざれば、罷休せざるものを疾むと云ひ、我は疫癘の上級の間に行はれざるを憾むといふものあり、亡状も亦甚しからずや。」「狂人走れば、狂せざる人も亦走る。衙門を挙げて奔競すれば、一人の奔競せざるを容さず」(『心頭語』)。これらは彼のやむを得ざるに出た公憤の声であった。

彼は何故にこの醜かつ陋なる官界より身をひいて、森鷗外として立つにいたらなかったか。

実と文との二元に苦しんだ一人に長谷川二葉亭があるが、長谷川辰之助は自らの文人としての立場を二葉亭四迷(くたばってしまえ)として遇した。彼は文のなすなきを知って実感によって動き、一生をささぐるに足る事業の世界、政治の領域へ転向した。鷗外は

文のなすなきを感じていたわけではない。否、文学において、かつての福沢諭吉が実学

に於て果したと同様な啓蒙と指導とにあたらしんとすることが、彼の本望であった(明治二十二年『しがらみ草紙の本領を論ず』参照)。この、文学に於てなすところあらんとし、かつ官界の醜にして陋なるを知った鷗外が、何故に尚自己の官職にとどまり、鷗外自らを葬らんとしたか。ひとつには勿論、彼が本来医学をもつて立つた人であり、文学はその余力から生れたものであることから由来する。

他のひとつを、私は彼の「あきらめ」からであると解する。然らばこの Resignation はどこから来たか。

若くして伯林に遊んだ頃を書いたものの中に次の言葉がみえる。

「生れてから今日まで、自分は何をしてゐるか。始終何物かに策うたれ駆られてゐるやうに学問といふことに齟齬してゐる。これは自分に或る働きが出来るやうに、自分を為上げるのだと思つてゐる。其目的は幾分か達せられるかも知れない。併し自分のしてゐる事は、役者が舞台へ出て或る役を勤めてゐるに過ぎないやうに感ぜられる。その勤めてゐる役の背後に、別に何物かが存在してゐなくてはならないやうに感ぜられる。策うたれ駆られてばかりゐるために、その何物かが醒覺す

る暇が無いやうに感ぜられる。勉強する子供から、勉強する学校生徒、勉強する官吏、勉強する留学生と云ふのが、皆その役である。

赤く黒く塗られてゐる顔をいつか洗つて、一寸舞台から降りて、静かに自分といふものを考へて見たい、背後の何物かの面目を覗いて見たいと思ひ思ひしながら、舞台監督の鞭を背中に受けて、役から役を勤め続けてゐる。此役が即ち生だとは考へられない。背後にある或る物が眞の生ではあるまいかと思はれる」(『妄想』)。

鷗外がこの背後にあるもの、舞台のうしろにあるものを究めんとして頼つたものはハルトマンの哲学であつた。それは、この世界に「有るが好いか無いが好いかと云へば、無いが好い」と教える無意識哲学であり、少壮、健康、友誼、恋愛、名譽、靈魂不滅、未来社会への憧憬等をすべてこれ「錯迷」と教える教説であつた。

私はこのハルトマン、シヨオペンハウエル流の人生觀、世界觀が、鷗外に及ぼした強い影響をみのがすことは出来ないと思う。人生のあらゆる幸福、価値、理想を「錯迷」とすることは、彼に冷眼と傍觀的態度と、そして多少の冷笑をあたえた。有るよりは無い方がよいにかかわらず尚俗人の間に処して生きんとする情勢は、彼に現象肯定と「あそび」を

与えた。

この、いままで意識の下にかくされていた人生、世界に対する考えが、**鷗外**小倉に一人ぼっちになったとき、**閨**をこして意識の表に出て来たのではなからうか。それが一応の公憤と不満を公にした後、次第に彼の心を占領して来たものではあるまいか。そして、この考えに浸ると同時に、文学の領域における啓蒙と指導という役割に対しても無情熱となり、また俗人の競望、**毀誉褒貶**にも無関心となり、『あそび』にあらわれた官吏木村の処世法を得たのではあるまいか、永遠の傍観者たる芽がそこにきざしたのではあるまいかと思われる。

小倉を舞台として書いた小説の一つに『鶏』というのがある。この主人公石田小介は、たしかに鷗外自身に外ならない。この『鶏』中の次の一句は注意してよい。

「石田は花壇の前に棒のやうに立つて、しゃべる女の方へ真向に向いて、黙つて聞いてゐる。顔にはをりをり微笑の影が、風の無い日に木葉が揺らぐやうに動く外には、何の表情も無い。軍服を着て上官の小言を聞いてゐる時と大抵同じ事ではあるが、少し筋肉が弛んでゐるだけ違ふ。微笑の浮ぶのを制せないだけ違ふ。」

彼は、この「微笑を制」しながら、軍医森

林太郎として働いていたのである。

明治三十五年、再び東京に転任するや、彼はまた鷗外として復活し、『芸文』をおこした。しかしそれは『しがらみ草紙』の如く、啓蒙と指導を本領とするものではない。「研究の微に入る」のが目的であるとその題辭に示されている。彼の『あそび』の中に書いている次のところは、単なる小説中の一句ではない。

「役所では人の手間取のやうな、精神のないやうな、附けたり of やうな為事をしてゐて、もう頭が禿げ掛かつて、まだ一向幅が利かないのだが、文学者としては多少人に知られてゐる。ろくな物を書いてゐないのに、人に知られてゐる。畜に知られてゐるばかりではない。一旦人に知られてから、役の方が地方勤めになつたり何かして、死んだもののやうにせられて、頭が禿げ掛かつた後に東京へ戻されて、文学者として復活してゐる。」

この彼はまた、『追儼』の中で、復活後の文学的仕事を「死人の踊」になぞらえている。復活後、彼は尚幾多の創作、翻訳、史伝、考証を公にした。が、それは彼自らいう如く、「思量の体操」「思量といふ小児へあたへる玩具」という気持がうかがわれる。この気持が清澄の度を加え、純化と洗煉を経たと

き、筆は愈々印象的となり、觀照の頂点に達した。彼の傑作とするにたる『山椒大夫』『寒山拾得』等は其処から生れいでたものであった。

(附記) 鷗外が後にいたり、小倉時代を題材として書いたものに、『鶏』『独身』『二人の友』等がある。それらによつて当時の鷗外をうかがうに、『しがらみ草紙』時代、即ち幸田露伴、井上通泰、賀古鶴所、その他文壇著名の士が相会して、夜中の一時二時まで文芸學術を論じたといわれる時代に比して、孤独なる世捨人を思わせるものがある。

『礼儀小言』の問題

大正六・七年（一九一七・八年）は日本にとつてのみならず、世界にとつても非常な年であつた。単に非常というには尽きず、歴史の上の転換点であつた。第一次世界戦争の未だ戦われていた大正六年三月にペテログラードに革命が起り、ロマノフ王朝は断絶した。そして^{れんごう}聯合國側は相ついでロシヤの仮政府を承認し、日本もまたそれになつた。七月にはケレンスキイ内閣が成立したが、それより先、四月にスイスから封印列車で露都に帰つたレーニンによつて指導されたボルシェヴィキが、十一月七日にケレンスキイ内閣を打倒して、ソヴェート政權を樹立し、独逸側との即時講和を宣言した。

たまたま読んでゐる河上肇『自叙伝』によると、彼はボルシェヴィキ革命を次のような受入れ方で受入れた。

「大正七年一月、ロシヤでは、社会主義ソヴェート共和国の憲法が制定された。地球上六分の一の地域を占めるロシヤにおいて、やがては共產主義社会に進化發展するであらうところの、社会主義社会が建設の緒に就いたといふ、人類の歴史あつてこのかた未曾有の、この大事件は、世界各国に偉大なる精神的影響を及ぼし、その余波は、東海の孤島日本国の思想界にも及んで来た。理論的には一応納得してゐても、そんなことが果して實際に実現できるものだらうかと、半信半疑の狀態に彷徨してゐた人々も、急に前途の光明を認めるやうになつた。現実の事実が人の精神に及ぼしたかうした影響力は、百の理論よりも強いものがあつたであらう。しかしロシヤ革命は、事実を以てせし以外に、また理論を以て、世界に大なる影響を及ぼした」（世界評論

社版第一巻、二二四頁）。

荒畑寒村はかつてこう書いた。

「大正六年はロシヤ革命の飛電が世界を震駭し、人心を刺戟したる年である。此の報道が日本の新興労働運動の上に、冥々隱約の間に多大の影響を及ぼし、深甚の感銘を与へたることは疑ひを容れぬ。労働争議は前年に比すれば、その回数に於て三倍となり、その人員に於て七倍となつた。（大正五年の争議件数一〇八、参加人員八、四一三。大正六年の件数三九八、参加人員五七、三〇九。）就中、春に起つた室蘭の日本製鋼所、夏に起つた長崎の三菱造船所、年末に起つた浅野造船及び横浜船渠等のストライキは、最も大規模なものであつた」（昭和三年二月『社会科学』特輯、日本社会主義運動史、一〇四頁）。

明治末の幸徳秋水事件以後弾圧されつづけていた日本の社会主義運動、労働運動が、第一次世界大戦に於て聯合國側に属していたことによつて急速に發展した産業とともに再び活潑となり、大正六・七年に於て徐々に組織化され、大規模となつて来た。同時に一方では、船成金の山下亀三郎が百万円を国防費として献納するという破天荒な出来事も大正六年末にあつた。上昇する産業資本と活潑化した社会運動との対立が、大正七年の夏に米騒動という奇妙な形で表面に出て来た。その年

の六月末には米価が崩落し、大阪、東京、神戸を始め各地の米穀取引所が立会停止のやむなきに到ったにかかわらず、七月には逆に米価が暴騰し、期米市場が大混乱に陥り、ためにまた立会停止という事態に立到った。国民の主食を投機の対象とする社会機構に対する自然発生的な反逆が、八月初めに富山県下の漁民の女房連によって切つて落された。女房達は米穀商を襲い、警官と衝突して喚声を挙げた。東京での白米小売相場が一升五十銭になるに及んで米騒動は全国的なものになった。当時新聞記者であつた今の社会党政調会長鈴木茂三郎は、昭和二年六月の雑誌『太陽』の明治大正の文化特輯号にこの米騒動従軍記を生々と書いている。そうしてこういう挿話を書き加えている。「滑稽なのは、阪神の沖合に纏ひしてゐた三井物産の荷物汽船の騒動であつた。船には布哇へ輸出する内地白米三万石がいくとくされてゐたので、神戸の三井支店の社員が、武装して夜警にあたつてゐた。命がけの夜警の手当で一日一円五十銭は、米三升の値打しかないといふので、社員がストライキをおこして騒いだ。三井は、不足してゐる白米の輸出をひそかに企てつつ、この日東京に於て、もつともらしく、救済資金の寄附を申出たのであつた。」

この全国に拡大した米騒動は七八千人の検

挙と軍隊の出動とによつて鎮圧された。第一次世界戦争もその年の十一月にいたつて幕を閉じた。

大正六・七年とはそういう事件をもつた年であつた。そういう年を我が思想界、文壇は如何に送迎したか。

森鷗外は東京日日、大阪毎日に連載中の北条霞亭伝を中絶して、大正七年の元旦から十日迄『礼儀小言』を発表した。一旦官を退いた鷗外は、六年の十二月二十五日付で新しく皇室博物館総長兼圖書頭に任ぜられ、高等官一等に叙せられ、五十七歳の春を迎えようとしている。『礼儀小言』のある解説者は、「冠婚葬祭等の儀礼に就いて所思を述べられたもの」と書いている。解説的には一応はその通りである。然し立入つていえば真意を距たること遠い。

「歳旦は褻衣を著て迎ふべきものではない。それゆゑに新聞紙が前年来わたくしの囊を累ね來つた儒者の伝記を載することを欲せざるのも理である。しかしわたくしは特に一文を草せむがために、咄嗟の間に新題目を捉ふることを得ない。已むことなく頃日屢人といつた所のものを録して、責を塞ぐ資となさうか。」

右の如きがその書出しである。鷗外が何故に大正七年元旦にそれを載せたか。このごろ

何故しなればそういうことを人に語つたか。

敏感炯眼な鷗外がロシアの三月革命、十一月革命に無関心な筈はない。またその革命に触発されて起つた労働運動とその動向に常人以上の注意を払つたことは推察するに難くない。そういう前提を置いて読めば、そこに論ぜられてゐる冠婚葬祭の礼は寧ろ従である。鷗外の真意は、寧ろそれらの題材をつなぐ次のような字間にあるとみななければならぬ。

「此の如き礼は皆滅び尽して、これに代るものは成立してをらぬのである。」

「前なるものが既に亡びて後なるものが興らぬ故である。」

「人生の所有形式には、その初め生じた時に、意義がある。」

「今の人類の官能は意義と形式とを別々に引き離して視ようとする。そして形式の中に幾多の厭惡すべき疵瑕を発見する。莊重の姿じて滑稽となるはこの時である。是は批評精神の醒覺に本づいてゐる。そして批評精神の醒覺は現代思潮の特徴である。」

批評精神が既に形式の疵瑕を発見する。莊重なる儀式は忽ち見功者の目に映ずる緩慢乏居となる。是に於てこの疵瑕を排除せむと欲する欲望が生ずる。この欲望は動もすれば形式を破壊するにあらずば已まぬものである。「人は形式を破壊するを以て危険なりとし、

眞の危険は意義を破棄するに至つて始めて生ずることを曉らざるが如くである。」

「我邦の現状がいかに形式の疵瑕を擲発する傾を有するも、猶未だ併せて意義を抛擲せむと欲するに至らざるは幸である。」

今の邦人は啻に意義を抛擲せむと欲せざるのみではない。わたくしの觀察する所を以てすれば、今人はもはや意義を寓するに堪へざる旧形式に嫌焉たるがために、別にこれに寓するに宜しき形式を求めてゐるものの如くである。」

「わたくしはこれに反して今人に内省を求めたい。今はあらゆる古き形式の將に破棄せられむとする時代である。わたくしは人のこの形式を保存せむと欲して弥縫の策に齟齬たるを見て、心に嫌ざるものがある。人は何故に昔形式に寓してあつた意義を保存せむことを謀らぬのであらうか。何故にその弥縫に勞する力を移して、古き意義を盛るに堪へたる新なる形式を求むる上に用ゐぬのであらうか。」

「畢竟この問題の解決は新なる形式を求め得て、意義の根本を確保するにある。我邦人をして眞に礼あらしむるにある。窃に今の名流の間に物色するに、能くこの解決に任ずべきものは必ずしも乏しくはなさうである。否。若し著意して大正の叔孫通たるべき人材を求めば、現代は実にその多きに勝へまい。」

鷗外が老来殊覺官情薄の一句を挿んだ漢詩を書いたのは大正四年七月十八日である。同じ年の九月十六日の日記には「婦女通信予が引退の報を伝ふ」とある。十一月二十二日の記に「次官大嶋健一に引退の事を云ふ」と見え、大正五年四月十三日付で正式に陸軍省医务局長の職を退いた。そうして閑房有至樂、足以送暮年の一句を人に示し、七月二十五日には老去誰妨守旧窠を第二句とする詩を作った。「空車」は大正五年七月に發表せられた注意すべき小品であることは、既に別のところで誌した。鷗外は白山の途上で屢々大きな骨格のたくましい馬のひいてゆく大きな空車に出会う。背の高い大男がその口を取つてゆく。大股に、大道狭しとゆくこの旁若無人の空車に鷗外が、「此車に逢へば、徒歩の人も避ける」云々の讚歎の言葉を送つたことも既に書いた。

同じ頃、鷗外は蘭軒伝の中で、淡淵、平洲の折衷派、人生のための學問派を攻撃して、學問を學問として研窮する考証學派の立場を主張し、折衷派を「尋常爲政者の喜ぶところとなるべき學風である」と言っている。抽齋、蘭軒伝について、「此等の伝記を書くことが有用であるか、無用であるかを論ずることが好まない。只書きたくて書いてゐる」とい

い、「此の如く世に無用視せらるるものを書くために、殆ど時間の総てを費やしてゐる」と『觀潮樓閑話』に書いて發表したのは大正六年十月であつた。

即ち、大正四年の後半から大正六年九・十月にいたる鷗外は、純粹に形式の讚美者であつた。空車、何の荷物をも載せていない空車の堂々たる歩きざまに我が心の写しをみた人であつた。空車の形式美を讚嘆した人であつた。人生に相渉ること、当世に役立つことを主眼とする學問を、折衷派乃至御用派として輕蔑した。鷗外のこの態度が無かつたならば、恐らく彼の最大傑作『澠江抽齋』は生れず、また所謂歴史小説の大半は今日の如き形では残らなかつたであらう。というのは、僕は次のことを言いたいのである。

鷗外は当代を下降の方向をたどっている一時期とみた。彼のレジグナティオンは根源的にはそこに由来する。同時に彼の保守主義もそこに由来する。鷗外は生來規範を好む人であつた。当代はこの規範がくずれ、無形式に、無拘束に、無型になつた時代である。曾て鷗外は『仮名遣に関する意見』（明治四十一年）に於て、新しい口語を、「田とも云はず、畠とも云はず、道のない所を縦横に歩く」ところの「乱雑極まる無茶なもの」、無茶な人民が勝手につくりだすものといった。そうし

て「今のやうに腐敗して来て革命的なことが出て来るといふことを防ぐには、新しい貴族を作れば好い。」口語の広く用ゐられて来るやうなものを見ては、之をぼつぼつ引上げて仮名遣に入れる。さういふやうに楯を取つて行くのが一番好い手段ではあるまいかと思ふのであります。私は正則と云ふことを認めて置きたいのであります」と言つた。鷗外によれば、歴史的仮名遣というものはない。文語の仮名遣は時代を超越した、唯一の、世界中で最も完全な正則である。そしてそれを旧華族と類比している。そこは形式と型と規範が純粹に保たれ、かつそれが支配している領域である。

幸徳秋水事件は鷗外の眼には右の形式と型と規範をおびやかす無茶なものと映つた。彼は事件直後に書いた『食堂』（明治四十三年十二月発表）の中で、ああいう連中は「先づ御国柄だから、当局が巧みに舵を取つて行けば、殖えずに済むだらう」と書いた。先の国語問題に於ては、無茶な口語を規整する実証的な規範としての文語の仮名遣があつた。いまの場合、無茶な人民を規整する「御国柄」はしかく実証的な權威ではない。ここで鷗外は自ら折衷派、人生社会国家に役立ち、尋常為政家（具体的には山県公）を喜ばす実用派となつて、「かのやうに」という当座の安全

弁を工夫した。神をいますかのように祀るといふ程度の人為的仮定的な「かのやうに」という形式を權威としてもちだすという似合わしからぬことをした。その安易な人為性は乃木大将殉死という一事件によつてたちまちにして粉碎され、鷗外は自らの姿勢を正して、『興津弥五右衛門の遺書』以下を書くにいたつた。現実に規範と生活形式を樹立しえないことを知つた鷗外は退いて歴史のうちに、否、日本に於ける唯一の型らしい型を形成した儒教と武士道のうちに權威と形式を求めたのである。若し發生的な考え方を以てすれば、鷗外の『興津弥五右衛門の遺書』以下の歴史小説もまた權威と形式の樹立という実用的、折衷的な必要から生れたものである。然しそれは鷗外の血の中に入り込んでゐる遺伝と、軍人という職掌と、そこから来る *Sinn* と、それを好ましいものとして受取る生理と心理になつたものであつた。またそれだからこそ彼の歴史小説が不朽のものたりえたのである。鷗外は發生的には実用的であつたものを、その結果に於て見事に一個の芸術作品として完成した。現に我々のそこに見るものは一種の古典的な形式美である。現実に新しい形式を見出しえなかつた鷗外は、儒教、武士道の古い型、形式、生活体系、*Sinn* を古典的な高さ（*höhe*）と美しさに於て提示した。

大正四年に兆した彼の退官への志向は、一層彼の実用的傾向を稀薄にし、内容を捨象した純粹形式に心を傾けしむるにいたる。彼は既に舵をとる位置にはいない。その心も必要もない。如何なる荷物も載せないで行く空車が自分の境地になつた。閒房有至楽と書き、老去誰妨守旧窠と書きうるにいたつた。僕のも愛好する短篇『ちいさんばあさん』、及び『澀江抽斎』はかくの如き境地から生れ出たのである。

ところで、実のところと書かざるを得ない僕の氣持に於て、鷗外は前記の如く、大正六年十二月二十五日付で博物館総長兼図書頭に任命せられた。同じ日に「何図枕上落除書」の句のある漢詩を書き、一週間後の大晦日には「老ぬれど馬に鞭うち千里をも走らんとおもふ年立ちにけり」とあらずもがなの下手な歌を人に送つてゐる。折角歴史小説、空車、澀江抽斎、伊沢蘭軒と進んで来た鷗外が、高等官一等に俗物的喜悅というよりは、ほくそえんでゐる姿が察せられて、やれやれと思わざるを得ないのである。そして再度とところで、『礼儀小言』は大正七年元旦から新聞に載つたのである。

『礼儀小言』が批評精神の醒覺を以て時代思潮の特徴としてゐることは既に書いた。所謂批評精神が単に批評的観念的である間は鷗外